

ダナ・ダナを「ちそつ」に

「食物には食べる人の名前が書いてある」という言い回しを初めて聞いたのは、ある工房の親方の口からであった。わたしはインドのグジャラート州カツチ地方でイスラーム教徒の染色職人集団の調査をしていた。その工房を主たる調査場所と決めて、毎日通つづくうち、親方の奥さんから、「うちで食事をどうるように言われ、食事時に行かないと、どうして来ないの?」と電話がかかってくるようになった。

ダナ・ダナとは、原義は芥子菜などの種のこと、毎日の食事のことを意味する。カツチでは小麦粉あるいは雑穀粉をこねて薄く伸ばして焼いたマニとよばれるものが主食である。それに野菜や肉の入った汁気の多い煮物、ミルクの脂肪をとり除いて発酵させた飲み物を添える。

その家で毎日食事をするようになつたある日、わたしは感謝の気持ちと遠慮を伝えるために、「毎日」からそうになつて、あなたに迷惑をおかけして申し訳ありません」と言った。それは日本人らしい言い方だつたかもしれない。それに対して親方は、「あなたは迷惑なんてかけていませんよ。だから、食物には食べる人の名前が書いてあると言つてではないですか。この食物にはあなたの名前が書いてあるのです」とカツチ一語による言い回しで答えてくれたのである。

食物には食べる人の名前が書いてある

金谷 美和

(かねたにみわ)

本館外研員

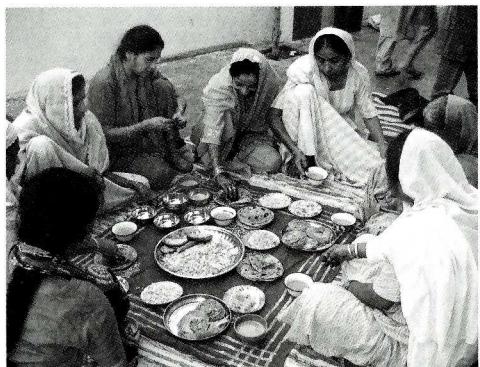
人生は
決まり文句で

最初、わたしは、この言い回しを、客に対する寛大さやもてなしを示すことばと理解していた。しかしそのうち、どうやらそれとは違うらしいと思うようになつた。また、このカツチ語の言い回しは、日本語による、先に「つけた」人に優先権がある、というような食物に対する所有や権利の観念とも違つようだとも考えた。

なぜなら、この言い回しには、食物があるところには行く、という意味があることがわかつてきただからだ。つまり、わたしとがわかつてきただからだ。つまり、わたしの手で作られた生業である。染色職人たちも、必要に応じて村から村へ、またカツチの外の世界へ、アラブ諸国や東アフリカへと移住をおこなつてきた。

明日は、どこに行くか。そのような、土地に縛られない人生を示しているのがこのカツチ語の言い回しであり、フィールドワークとしてのわたしの人生にとつても、ぴたりの決まり文句だと思っている。

土地に縛られない人生



結婚式のために遠方から来た客とともに朝食を囲む



客のために大鍋で料理をする

